帝京科学大学紀要Vol.18（2022）pp.157-164

コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習に関する文献検討

大森美保

帝京科学大学医療科学部看護学科

The Literature Review about Alternative Practice of On-site Practice for Nursing Students in Corona Disasters

Miho OMORI

Department of Nursing, Faculty of Medical Sciences, Teikyo University of Science

キーワード：コロナ禍、看護学生、代替実習、文献検討
Keywords：corona disaster, nursing student, alternative practice, literature review

Ⅰ．はじめに

2019年末に中国武漢で最初に感染が確認された新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、世界保健機構（WHO）は、2020年３月11日にパンデミックを宣言した。日本においても、2020年３月からの小・中学校や高校の一斉休校、４月に緊急事態宣言が発令されるなど、全国に大きな波紋を呼んだ。感染者の増加と重症化により医療提供体制が逼迫されたことも加わり、看護系大学においては、多くの施設での実習受け入れが中止となった。このような状況の中で、文部科学省と厚生労働省から「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所および養成施設等の対応について」の事務連絡が通達された[1)]。これには、実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難な場合は、年度をまたいで実習を行っても差し支えないこと、これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合、実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないことが示された。文部科学省の調査によると、看護系大学の看護師養成課程における臨地実習は、2020年４月20日時点で、休校（実習予定変更）が60％、代替措置を講じて実施が14％であった。７月時点では、大学の看護師養成課程における臨地実習の代替措置ありが92％、そのうちオンラインが25％、学内実習・演習が28％、複数組み合わせ（オンラインと学内実習・演習の両方など）が35％、その他（延期、オンデマンド等、事例学習、レポート）が12％であった[2)]。実習の代替方法については、有効な方法は確立されておらず、各大学において制約された条件の中でより効果的な実習となるよう、初めての経験に手探りで対応していることがうかがえる。

看護師の人材養成の在り方については、文部科学省において2011年に「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」報告[3)]がまとめられ、学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標が示された。さらに、同検討会において2017年に、実習場の確保、学部教育と卒後の看護実践との乖離の解消、根拠に基づいた看護実践ができる能力の向上を目指し、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」の中で、学士課程における看護実践能力の取得を目指した学修目標が示された[4)]。

看護実践能力育成における臨地実習の意義[5)]は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことであり、看護の方法について「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠な課程とされている。

本研究は、コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習の現状と課題を明らかにし、今後の実習のあり方の示唆を得ることを目的としている。2021年度は新型コロナウイルスのワクチン接種が加速されているものの、変異株の出現など、いまだに終息の目途が立っておらず、今後も臨地実習への影響は続くものと考えられる。このような状況の中で、臨地実習の代替実習としての学内実習を充実し、教育

の質を確保することが課題と考える。

Ⅱ．目的

コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習の現状と課題を明らかにする。

Ⅲ．方法

1．対象文献

2020～2021年に発表された研究論文について、医学中央雑誌（Web版）を用いてキーワードの「看護」を固定し､「実習」「学内実習」「コロナ禍」「COVID-19」「オンライン」で検索し、絞り込み条件として、会議録を除く原著論文とした。（検索日：2021年７月）

2．分析方法

マトリックス方式[6]による文献整理を実施し、分析した。

3．倫理的配慮

本研究は、文献研究であるため研究倫理員会による審査は受けていない。分析対象の文献を論文中に示す場合は、内容を損なわないように要約した。

Ⅳ．結果

医学中央雑誌Web版を用いて、上記のキーワードを用いて検索した。

抽出された文献のうち、対象文献を学術雑誌と大学紀要に限定し、動物看護と保健師課程,助産師課程を対象としたものを除外した（表１）。

表１で抽出された文献44件のうち、実践報告と重複している文献を除く６件について、マトリックス法による分析を行った。

1．対象となった文献の概要

分析対象となった６件の文献[7－12]の概要を表２に示した。

表１　医学中央雑誌Web版による検索数

検索Word（条件：会議録を除く原著論文）	総数	学術誌と大学紀要に限定し、動物看護、保健師・助産師課程を除外
看護　実習　コロナ禍	39	7
看護　実習　COVID-19	126	14
看護　実習　オンライン	44	12
看護　学内実習	27	11
合計	236	44

1）発表年

新型コロナウイルスの感染拡大が発生したのは2020年であるため、2020～2021年の文献を検索したが、すべて2021年に報告されたものであった。

2）研究方法

（1）研究デザイン

研究デザインはすべて、量的研究で質問紙調査であった。

調査内容は、実習方法・内容と学修効果に関するものが５件、実習に対する思いが１件であった。

分析方法は、アンケートの単純集計と、自由記載内容の類似性の分類であった。縦断研究は１件で、実習前後にアンケート調査して前後を比較検討していた。他５件は横断研究で、実習開始前の調査が１件であり、他の４件は実習終了後の調査であった。

アンケートの回収方法は、回収箱が２件、オンラインが４件であった。

（2）対象者

対象者は、看護学科３年生が２件、４年生が４件であった。在宅看護学実習履修者を対象としたものが２件、成人看護学実習１件、母性看護学実習１件、統合看護実習１件、成人看護学実習と老年看護学実習の両方を対象としたものが１件であった。

（3）実習方法・内容

実習方法・内容の調査を行った５件の文献のうち、実習方法がオンラインのみは３件、オンラインと対面の併用が２件であった。

事例患者の看護過程の展開が４件であり、そのうち模擬患者事例が２件、動画教材による事例１件、テキストによる事例１件であった。模擬患者事例２件についてはオンライン上で模擬患者との関わりを行っていた。

対面実習の内容は、看護過程に関するグループ討議が１件、講義やディスカッションとDVD視聴などが１件であった。

2．実習の成果

実習の成果について、文献ごとに記述する。

文献１

動画事例を活用した実習について、【動画の内容から訪問看護の実際がイメージできた】【動画の解説がわかりやすく効果的だった】【動画を自分のペースで視聴できた】【ペーパーペーシェントよりわかりやすい】【実習では体験する機会が少ないことも平等に学べた】ことがあがっていた。動画を使用した教材により、ほぼ全員の学生が在宅看護実習

のイメージトレーニングに役立った。動画について「実際に同行しているような場面が多かった」という臨地実習に近い体験を学習できた。また個別性や環境に合わせて限られた資源の中でケアを提供する工夫、家族も含めた在宅看護の視点や役割について考え学ぶことができた。

課題については、対面学習の際に次回の遠隔学習の説明をしたことで、学生が個人でも実習に取り組めた。

文献２

８つの実習目標の自己評価では、いずれの項目も実習前より実習後が高かった。実習の成果として【在宅看護学実習の本質に触れる学修】【自己のペースで行える学修】【対話促進型相互学修】【感染拡大防止】の４つのカテゴリが抽出された。模擬事例であっても、尊厳ある生活者として真摯に向き合い看護を展開する姿勢が育まれており、オンラインであっても学生の在宅看護学実習に対する動機づけを高め主体的な学修を促すことができた。

文献３

模擬患者からの情報収集や計画の仮想実施について、患者を想起しながらの情報収集や計画実施は６割以上の学生ができたと回答した。さらに、得られた情報を基に看護過程の解釈・分析や計画の立案ができたと回答した学生は８割以上であった。計画の評価に関しては、６割以上の学生ができたと回答した。

Zoomでのカンファレンスや教員への質問等、コミュニケーションに関しては今までの実習と変わりないとの回答が多かった。

オンライン実習の利点として、オンラインでのコミュニケーションを考える機会となったり、調べたり考えたりする時間が十分とれ記録の内容を深められた。

文献４

看護過程の展開については、８～９割の学生は妊娠期から産褥期まで経時的に対象を捉えることができ、対象を理解したうえで個別性を考えて看護計画を立案できたと感じていた。

看護技術については、画面上の褥婦に対して、言葉のみで伝える困難さを感じていた。口頭のみで技術を伝えるためには、自分自身が十分に知識を理解しておく学習の必要性に気づいていた。

母性看護の特徴と理解については、母子関係の形成過程を理解しやすい実習内容であったかに関して約９割の学生が肯定的な回答であった。

実習への取り組みとして、「リモートでの実習は感動がないところが残念な点」「実際に褥婦さんや赤ちゃんに会うことができなかったのは残念」「就職するまでに一度でいいから臨地に行きたい」という、臨床への興味や関心が惹起された。

Google meetでの発表・カンファレンスについて〈学びの共有〉〈画面の共有〉に関する肯定的な意見があった。

文献５

学内実習準備として、ICT活用に対する学生の苦手意識と利用法に慣れていないクラスルームを導入するにあたり、実習前に使い方について段階を追って確認し準備を整えた。例年の実習では、実習が始まると、忘れた、見ていない、聞いていないということが多々あったが、本実習の進行については、情報を自ら得るために、何を、どのように使うかを考え、主体的に行動していた。

学生たちは多くの臨床看護師や教員の経験を聞き、看護の意義や、自分がどのような看護を行っていきたいかを考えることができた。学生は、他者の経験から自己の看護観に影響を受け、臨床実践を想像し、自己の将来に繋げていた。

実習評価として、良かった点は、他学生と協働できたこと、ICTと対面を組み合わせたことで、俯瞰しながら学びを深めたことがあった。また、学生は「多くの先生たちが自分たちのことを考え、対応してくれた」「教員が最善を尽くしてくれた」と教員の存在や指導が充実していたと感じていた。科目責任者が学科内教員の経験を知っていたことで学生の興味関心やレディネスの状況から、教員の経験を相互補完的に活用することができた。

３．実習に関する課題

実習に関する課題について、文献ごとに記載する。

文献１

動画事例について、特にSデータ（対象の主観的データ）や住宅環境に関する情報がわかりにくいという意見があり、動画教材は学んでほしいことにフォーカスして作成されているが、実際の訪問の場面では、多くの情報の中から意図的に必要な情報を収集する必要があり、情報収集力を養うことが難しい。また、通信環境によっては学習を進めるうえで影響を受ける。

実習のスケジュールに関して、【グループワークで学びが深まった】とする一方でグループワークの時間が長いと感じている学生もおり、グループワー

クや全体発表の時間配分について１割弱の学生が改善を求めていた。

遠隔実習では、教員の直接的な指導が得られない中で、学習がスムーズに進まなかったこともあり、学生がタイムリーに問題解決できるような仕組みが必要であった。

文献２

実習の課題として【オンライン学修による在宅看護イメージ化の限界】【オンライン学修による対話促進型相互学修の課題】【臨地実習への希求】【オンライン学修の改善点】の４つのカテゴリが抽出された。目の前に療養者や家族がいるわけではないため理解やイメージ化の限界に直面し、計画した看護の実践と評価を繰り返しながら分析を深める円環的プロセスを展開できないため、自己の思考を深めることに難しさを感じていた。

文献３

教員が模擬患者を演じたが、学生は教員を患者と思えず、情報取集や計画の実施に抵抗感を抱いていた。また、教員は複数の学生の模擬患者を実施するため、学生１人に対する時間が制限され、学生は自分自身のペースで実施していないことに不満を抱いた。

看護過程の展開において、関連図を通して患者の全体像を把握しているが、関連図が描けても患者をイメージできない学生もいた。看護過程を基に患者を理解する方法は学生にとって一助に過ぎず、臨地実習の場で学生自身が自分の目で見なければ患者をイメージできない可能性がある。

オンライン実習の欠点としては、看護技術の実践や治療を見られないことがあがり、授業での体験や映像での既習学習の内容であっても、「その時に見た」ということが必要であった。

文献４

共感的な関わりの中で信頼関係を築くことに関して、２割の学生ができなかったと感じていた。学生は対象者との日々の関わりや何気ない会話の中で、その心理的側面を捉え、信頼関係を築いていくが、オンライン実習ではそれらができずに達成感が低かった。

Google meetでの発表・カンファレンスについて「人数が多いと発言しにくい、意見がまとまらない」ことなど〈人数がカンファレンスに影響〉していたこと、〈話すタイミングの難しさ〉や「大事なところが聞こえなかった」など〈電波の問題〉があった。また、教員との関りについては、（オンラインだと）先生との会話がしにくいなど、関わりの希薄さなどが述べられていた。

文献５

知識理解を深める行動はできたが、臨地実習で経験する患者との関わり、ケア提供（技術）、看護師と協働することはできなかった。また本実習での看護技術演習はできず、看護の視点から適切に判断する、解決するために必要な知識の補完にとどまり、看護技術やコミュニケーション等の経験不足がある。

教員との関わりでは、教員に相談したくてもアクションできずに待っている学生もいたため、指導教員の配置人数に課題が残った。実習の改善点としては、学生が使える学内のWi-Fi環境やPC環境の充実や、リモートにできるものはリモートにしてほしいなど、ICT環境や活用に関することがあった。学生は、複数患者の受け持ちを通して学びを深めたい気持ちを持っていたが、学内では経験することが難しく、【将来の不安】に繋がっていた。

４．学生の思い（文献６）

実習に対する学生の思いについて、①臨地実習については、対面授業がないことから〔自分の看護技術に自信がない〕〔いろいろ失敗しないか不安だ〕〔看護過程をうまく使えるか不安だ〕など85％以上が不安を感じていた。②COVID-19感染リスクに関しては〔患者さんやその家族、医療者、実習メンバーに感染させないか不安だ〕と全員が回答した。③学内実習・オンライン実習となった場合は〔どのような実習になるかわからなくて不安だ〕〔臨床での経験不足になることが心配だ〕が85％以上であった。④看護職としての将来は〔病院実習ができないまま卒業するのは心配だ〕〔今後どういわれるか不安だ〕〔あまり患者さんと接したことがないままであることが不安だ〕が60％以上であった。一方で80％以上の学生が〔COVID-19感染問題の影響による偏見や待遇等を考え、看護師になる気持ちが揺らいでいる〕にそう思わないと回答し、学生の意志が揺らいでいないことが確認された。⑤教員への期待・求めることは、【安全に実習したい】【早く情報が欲しい】【説明がほしい】などがあった。

Ⅴ．考察

コロナ禍で臨地実習が中止となる中、代替実習として実施された学内実習の現状と課題について分析した結果、分析対象の６文献の報告によると、それぞれの実習において、ある一定の学修成果が得られ

表２　コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習に関する研究

文献No	著者（発行年）	表題	目的	研究対象および方法	実習方法・内容	結果・考察
1	山口裕子他（2021）	臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法の報告－在宅看護実習での学生アンケートから－	動画を用いた遠隔での学習と対面でのグループワークという教育方法の効果と課題を明らかにする	【対象】看護学科3年次生111名 【方法】学内実習最終日のアンケート調査 【調査内容】１）動画での事例を活用した実習について、２）学内実習のスケジュールや学習内容について 【分析方法】分析対象となった記述データを抽出し、同じ意味・内容を示す類似性をもとに分類した	【実習方法】遠隔学習（動画視聴、記録の作成）と対面学習（グループワーク、教員からの指導）での学内実習。 【実習内容】動画教材を使用した事例による看護過程の展開 臨地実習に近い形で、基本情報、訪問看護師辞書等の書類を教員が作成し、学生はそれらから情報収集しながら動画視聴により訪問看護に同行したと想定した。	回答数：109名 動画を使用した教材により、ほぼ全員の学生が在宅看護実習のイメージトレーニングに役立った。動画について「実際に同行しているような場面が多かった」という臨地実習に近い体験を学習できた。また個別性や環境に合わせて限られた資源の中でケアを提供する工夫、家族も含めた在宅看護の視点や役割について考え学ぶことができた。 特にSデータや住宅環境に関する情報が分かりにくいという意見があり、動画教材は学んでほしいことに フォーカスして作成されているが、実際の訪問の場面では、多くの情報の中から意図的に必要な情報を収集する必要があり、情報収集力を養うことが難しい。また、通信環境によっては学習を進めるうえで影響を受ける。 実習のスケジュールに関して、【グループワークで学びが深まった】とする一方でグループワークの時間が長いと感じている学生もおり、グループワークや全体発表の時間配分について1割弱の学生が改善を求めた。課題については、対面学習の際に次回の遠隔学習の説明をしたことで、学生が個人でも実習に取り組めた。一方で、遠隔実習では、教員の直接的な指導が得られない中で、学習がスムーズに進まなかったこともあり、学生がタイムリーに問題解決できるような仕組みが必要。
2	岡田麻里他（2021）	対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価－COVID-19感染予防対策を契機に実装した教育システム発展のために－	実習後の成果を明らかにし、新たな教育手法としての示唆を得る	【対象】在宅看護学実習を履修する看護学科4年次生71人 【方法】実習前後の量的・質的研究 【調査内容】自己学修時間、主体的学修方法、実習目標に則した8項目 【分析方法】時間・日数については平均・最短・最長を算出し、学習方法は割合を算出、実習目標に即した項目は平均±SDを算出し実習前後で比較 実習後の自由記述の分類	【実習方法】対話型オンライン実習 【実習内容】『受け持ち事例の看護過程の展開』と『課題探求学修』 事前学習による「自己学修による在宅看護事例の理解」と、実習期間の「事例に基づく在宅看護の対象理解の共有と深化」「課題探求と対象理解の結び付け」「在宅看護の知識と個別性を踏まえた技術の統合と再構築」「課題探求の統合」から構成した。 テキストの事例患者の看護過程の展開	回答数（回収率）：実習前44人（62.0%）実習後28人（39.4%） 8つの実習目標の自己評価ではいずれの項目も実習後が高かった。実習の成果として【在宅看護学実習の本質に触れる学修】【自己のペースで行える学修】【対話促進型相互学修】【感染拡大防止】の4つのカテゴリが抽出された。模擬事例であっても尊厳ある生活者として真摯に向き合い看護を展開する姿勢が育まれており、オンラインであっても学生の在宅看護学実習に対する動機づけを高め主体的な学修を促すことができた。 実習の課題として【オンライン学修による在宅看護イメージ化の限界】【オンライン学修による対話促進型相互学修の課題】【臨地実習への希求】【オンライン学修の改善点】の4つのカテゴリが抽出された。目の前に療養者や家族がいるわけではないため理解やイメージ化の限界に直面し、計画した看護の実践と評価を繰り返しながら分析を深める円環的プロセスを展開できないため自己の思考を深めることに難しさを感じていたと推測された。オンライン実習では、〈他の学生の意見と異なると不安になった〉〈グループメンバーの進捗状況が分かりにくかった〉という学生間の相互学修のあり方や、〈課題探求学修はオンライン学修で深めるには限界があった〉のような課題探求学修の教育方法や評価方法については継続的な検討が必要である。
3	桑村淳子他（2021）	成人看護学実習Ⅱ（慢性期）のオンライン実習における学習効果と課題－実習語のアンケート調査結果より－	オンライン実習の学習効果や課題について検討する	【対象】成人看護実習Ⅱを履修した4年生39名 【方法】manabaを用いたオンライン実習後のアンケート調査 【調査内容】模擬患者からの情報収集や計画の仮想実施に関しての抵抗感、模擬患者から得た情報を基にした看護過程、Zoomによるカンファレンスや教員への質問などのコミュニケーション、オンライン実習のメリットやデメリット 【分析方法】Excelを用いた単純集計、自由記述の分類	【実習方法】オンライン実習 【実習内容】教員が模擬患者を演じ、学生はZoom画面上で模擬患者とコミュニケーションをとる。 入院前の状況は医師のカルテ記入を想定して教員が作成し、入院後はバイタルサインや検査結果等をクラウド型教育支援サービスのmanabaへ実習日の朝に提示した。 学生はカルテと模擬患者とのコミュニケーションから情報を得たり、計画を仮想実施したりした。	回答数（回収率）：34名（87.2%） 模擬患者からの情報収集や計画の仮想実施について、患者を想起しながらの情報収集や計画実施は6割以上の学生ができたと回答した。さらに、得られた情報を基に看護課程の解釈・分析や計画の立案ができたと回答した学生は8割以上であった。計画の評価に関しては、6割以上の学生ができたと回答した。模擬患者に対し、学生は教員を患者と思えず、情報取集や計画の実施に抵抗感を抱いていた。また、教員は複数の学生の模擬患者を実施するため学生1人に対する時間が制限され、学生は自分自身のペースで実施していないことに不満を抱いた。 看護過程の展開において、関連図を通して患者の全体像を把握しているが、関連図が描けても患者をイメージできない学生もいた。看護過程を基に患者を理解する方法は学生にとって一助に過ぎず、臨地実習の場で学生自身が自分の目で見なければ患者をイメージできない可能性もある。 Zoomでのカンファレンスや教員への質問等、コミュニケーションに関しては今までの実習と変わりないとの回答が多かった。 オンライン実習の利点として、オンラインでのコミュニケーションを考える機会となったり、調べたり考えたりする時間が十分とれ記録の内容を深められた。欠点としては、看護技術の実践や治療をみられないことがあげり、授業での体験や映像での既習学習の内容であっても、「その時に見た」ということが必要。
4	早瀬麻子他（2021）	オンラインでの母性看護学実習における学習効果	オンラインでの学習内容は、対象理解や看護ケアに繋がり、学生の実習目標を達成できるものであったかを考察する	【対象】看護学科4年生61名 【方法】実習内容や実習評価項目を中心としたGoogle formsを使用したアンケート調査。 【調査内容】「事例提示について」「看護過程の展開について」「Google meet看護技術について」「実習記録について」「実習内容について」「グループでの学び」「教員との関わり」の7項目は4段階の選択肢 「Google meetでの技術チェックについての意見」「Google meetでの発表・カンファレンスについての意見」 「実習に関する感想・意見・要望など」は自由記述 【分析方法】単純集計と自由記載の意味内容が類似しているもの・肯定敵意見・否定的意見の分類	【実習方法】オンライン同時双方向型 【実習内容】事例を用いて１）バースプランと出産場所についてのディベート２）看護過程の展開３）看護技術チェック４）退院後1ヵ月までの社会資源の4つの課題を実施。 1）では、病院と助産所での分娩動画の視聴と、病院編は事例に基づき教員自身が配役となり動画を作成。 3）技術チェックは、自宅の学生と実習室の教員をオンラインでつなぎ、学生が病室に訪問しているイメージで教員が褥婦役となりロールプレイングを実施。	回答数（回収率）：37名（60.7%） 看護過程の展開については、8～9割の学生は妊娠期から産褥期まで経時的に対象を捉えることができ、対象を理解したうえで個別性を考えて看護計画を立案できたと感じていた。 看護技術については、画面上の褥婦に対して、言葉のみで伝える困難さを感じていた。口頭のみで技術を伝えるためには、自分自身が十分に知識を理解しておく学習の必要性に気づいていた。共感的な関わりの中で信頼関係を築くことに関して、2割の学生ができなかったと感じていた。学生は対象者との日々の関わりや何気ない会話の中で、その心理的側面を捉え、信頼関係を築いていくが、オンライン実習ではそれらができずに達成感が低かった。 母性看護の特徴と理解については、母子関係の形成過程を理解しやすい実習内容であったかに関して約9割の学生が肯定的な回答であった。 実習への取り組みとして、「リモートでの実習は感動がないところが残念な点」「実際に褥婦さんや赤ちゃんに会うことができなかったのは残念」「就職するまでに一度でいいから臨地に行きたい」という、臨床への興味や関心が惹起された。 Google meetでの発表・カンファレンスについて〈学びの共有〉〈画面の共有〉に関する肯定的な意見と、「人数が多いと発言しにくい、意見がまとまらない」ことなど〈人数がカンファレンスに影響〉していたこと、〈話すタイミングの難しさ〉や「大事なところが聞こえなかった」など〈電波の問題〉があった。また、教員との関りについては、（オンラインだと）先生との会話がしにくいなど、関りの希薄さなどが述べられていた。
5	太田晴美他（2021）	新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価－学生アンケート結果から－	学内統合看護実習を評価し、今後の課題について明らかにする	【対象】看護学科4年生で、統合看護実習受講学生80名 【方法】Google formsを利用した無記名アンケート調査 【調査内容】実習進行に役立てたもの、学内実習内容、実習の取り組み、実習評価 【分析方法】選択問題は単純集計、自由記述は類似する内容を検討し、内容分析した。	【実習方法】Google Classroomを利用した音声課題、対面学修、面接、自己学修 【実習内容】実習導入、キャリア、看護の実際、看護管理、患者・家族をテーマとした音声課題の実施。対面学習（医療安全、アサーション、看護管理・看護の魅力、複数患者の受け持ち・多重課題）は、講義、討議、DVD視聴。 上記の内容については、22名の教員が対応し、学生指導担当（常時、教室で指導する）教員は3名で行った。	回答数（回収率）：79名（98.7%） 学内実習準備として、ICT活用に対する学生の苦手意識と利用法に慣れていないクラスルームを導入するにあたり、実習前に使い方について段階を追って確認し準備を整えた。 例年の実習では、実習が始まると、忘れた、見ていない、聞いていないということが多々あったが、本実習の進行については、情報を自ら得るために、何を、どのように使うかを考え、主体的に行動していた。 知識理解を深める行動はできたが、臨地実習で経験する患者との関わり、ケア提供（技術）、看護師と協働することはできなかった。また本実習での看護技術演習はできず、看護の視点から適切に判断する、解決するために必要な知識の補完にとどまり、看護技術やコミュニケーション等の経験不足は否めない。 学生たちは多くの臨床看護師や教員の経験を聞き、看護の意義や、自分がどのような看護を行っていきたいかを考えることができた。学生は、他者の経験から自己の看護観に影響を受け、臨床実践を想像し、自己の将来に繋げていた。 実習評価として、良かった点は、他学生と協働できたこと、ICTと対面を組み合わせたことで、俯瞰しながら学びを深めたことがあった。また、学生は「多くの先生たちが自分たちのことを考え、対応してくれた」「教員が最善を尽くしてくれた」と教員の存在や指導が充実していたと感じていた。科目責任者が学科内教員の経験を知っていたことで学生の興味関心やレディネスの状況から、教員の経験を相互補完的に活用することができた。一方で、教員に相談したくてもアクション出来ずに待っている学生もいたため、指導教員3名の配置に課題が残った。実習の改善点としては、学生が使える学内のWi-Fi環境やPC環境の充実や、リモートにできるものはリモートにしてほしいなど、ICT環境や活用に関することであった。学生は、複数患者の受け持ちを通して学びを深めたい気持ちを持っていたが、学内では経験することが難しく、【将来の不安】に繋がっていた。
6	高岡寿江他（2021）	新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の思い	COVID-19感染拡大下で3年次の看護学実習に臨む学生の思いを明らかにする	【対象】看護学科3年次の成人看護学実習（急性期・慢性期）および老年看護学実習を履修予定の学生68名 【方法】Google formsを用いた質問紙調査法による実態調査研究 【調査内容】①臨地実習②臨地実習におけるCOVID-19感染リスク③学内実習・オンライン実習となった場合④看護職としての将来⑤教員への期待・求めること 【分析方法】単純集計と自由記述のコード化、カテゴリ化	－	回答数（回収率）：42名（61.8%） ①臨地実習については、対面授業がないことから〔自分の看護技術に自信がない〕〔いろいろ失敗しないか不安だ〕〔看護過程をうまく使えるか不安だ〕など85%以上が不安を感じていた。②COVID-19感染リスクに関しては〔患者さんやその家族、医療者、実習メンバーに感染させないか不安だ〕と全員が回答した。③学内実習・オンライン実習となった場合は〔どのような実習になるか分からなくて不安だ〕〔臨床での経験不足になることが心配だ〕が85%以上であった。④看護職としての将来は〔病院実習ができないまま卒業するのは心配だ〕〔今後どういわれるか不安だ〕〔あまり患者さんと接したことがないままであることが不安だ〕が60%以上であった。一方で80%以上の学生が〔COVID-19感染問題の影響による偏見や待遇等を考え、看護師になる気持ちが揺らいでいる〕にそう思わないと回答し、学生の意志が揺らいでいないことが確認された。⑤教員への期待・求めることは、【安全に実習したい】【早く情報が欲しい】【説明がほしい】などがあった。 対面授業がなかったことによる看護実践への不安に対し、実習前にe－ラーニングを活用した看護技術の復習や自宅での練習、オンラインでの演習で補い対応すること、交通機関での感染予防として、実習開始時間の調整や帰宅時間の配慮、【早く情報がほしい】【説明がほしい】が示す、情報が不確かなことによる不安に対する、判断が難しい状況も含めて学生へのタイムリーな情報提供が課題。

ていた。臨地実習が実施できない場合においても、学生の教育の質を担保するため、予定していた実習の目標を変えずに、目標を達成させるための実習方法・実習内容を考え実施していた。

対象文献のうち５件が領域別実習、１件が統合実習であった。領域別実習では事例患者の看護過程の展開をしており、事例の提示方法について、ペーパーペーシェントで看護過程を展開した実習では、目の前に療養者や家族がいるわけではないため理解やイメージ化の限界があった（文献２）こと、事例を動画で提示した実習ではイメージトレーニングに役立ち臨地実習に近い体験を学習できていた（文献１）ことから、紙面上の患者を想像するより動画を視聴する方が学生の理解が深まると考えられる。文字から患者を描くのではなく、映像で動く患者を見て、声を聴くことで、生身の人間として対象を捉えられたと考える。教員が模擬患者を演じた実習では、学生は教員を患者と思えず抵抗感を示していた（文献３）。しかし、教員が演じた模擬患者に対しリアリティがあった、圧倒されたという意見も報告[13]されており、教員が模擬患者を演じることの効果については様々な条件により異なることが考えられ、何を目的とした実習でどのような患者を演じるか等、リアリティのある患者について検討が必要である。

多くの学生は、オンライン実習により、調べたり考えたりする時間が十分とれ記録が深められた（文献３）こと、個人でも実習に取り組めた（文献１）こと、動機づけを高め主体的に学修できた（文献２）こと、実習の進行についての情報を自ら得るために主体的に行動していた（文献５）ことが報告されており、目の前に教員や指導者がいない状況の中で、オンラインでは自らが積極的に行動しなければ実習が進行しないことで主体性が育まれていたと考える。

オンライン実習では、動画や教員が模擬患者を演じて実習した場合であっても、信頼関係の構築ができなった（文献４）ことや、看護技術やコミュニケーション等の経験不足（文献５）などの課題があった。信頼関係の構築には、繰り返しのコミュニケーションが必要であり、オンライン上で限られた回数、限られた時間でのコミュニケーションをとるだけでは、信頼関係の構築には至らなかったと考える。圓増[14]は、医療従事者と患者との信頼関係の構築に向けて、目的を共有することをあげ、たとえ相手のための行為でも相手の意向に反していないかを確認すること、また自身の行為のあり方を見直そうとする姿勢を常に持つことを述べている。また目的を共有することは相手の求めをできる限り受け入れることができるよう、その背景をなす相手の事情に目をむけることや、目的を実現するためにはどのような手段が必要であり、またそれはなぜかについて相手と理解を一致させるよう努めなければならないとしている。これには事例で提示される内容よりさらに深く、患者の想いや価値観、背景等を探求する必要があり、学生と患者との相互関係の中からでこそ学べる内容であると考える。

卒業時到達目標[15]のヒューマンケアの基本に関する実践能力の中に「実践する看護を説明し意思決定を支援する能力」「援助的関係を形成する能力」が示されており、援助的関係の形成には看護の対象となる人々と信頼関係の形成が第一歩となる。看護実践に不可欠な援助的人間関係形成能力や専門職者としての役割や責務を果たす能力は、看護サービスを受ける対象者と相対し、緊張しながら学生自ら看護行為を行う過程で育まれるもの[16]とされている。

菱沼[17]は、臨地実習で学ぶことについて、看護実践は看護職者が相手に専心することから成り立つので、人形や模擬患者ではケアは成立しないこと、看護実践の体験と、それを通してケアとしての看護を学生が自分の中に根づかせ、語れることと述べている。学生は対象者へのケアや関わりを通して人間関係の形成を学ぶため、事例患者では限界があったと考える。また、オンライン実習では、学生が実際に看護技術を提供する経験がなく（文献１～５）、対面学習がなかったことによる看護技術への自信がないことや臨床での経験不足に対する不安（文献６）もあり、学内実習だけでは補えない臨地実習でしか得られない学修効果がうかがえた。理論と実践を往還させるためには、講義等の授業で習った理論をただ適用するのではなく、どのように活用すればよいのか、対象に合わせて適切な理論を選んで（思考・判断）、提案する（表現）ことが必要であり、さらに実践を通して振り返り（省察）をすることが深く学ぶことに繋がる[18]。

各領域の実習については、在宅看護学実習２件、成人看護学実習１件、母性看護学実習１件のみであり、各領域実習の学修成果や課題の特徴を捉えるには至らなかった。また、今回は３年生、４年生を対象とした領域別実習と統合実習に関する文献のみであり、１、２年生で実施される基礎看護学実習に関するものはなかった。看護を学び始めて、看護とは何か、看護過程をどのように展開するのか、３年次

以降の領域実習の基礎となる実習が学内実習になった場合、その後の学修や実習の積み重ねにどのような影響を及ぼすのかも不明である。

今回の文献検討から、看護過程の展開は臨地実習でなくても学べる可能性が示唆されたが、分析対象となった文件数が少ないことや複数の領域の実習であったこと、実習方法が様々であったことから、今後も慎重に検討していく必要がある。さらに、臨地実習で学ぶことが必要な内容は、患者との人間関係の構築とケア（看護技術）の提供を通した振り返りであることが示唆された。文部科学省の有識者会議においても、臨地で特に学ぶ必要があることや臨地での実習でコアとなる学修内容を見極めたうえで、臨地以外でもある程度修得可能なものとそうでないものを整理する必要があり、臨地での学修効果を最大にするために、臨地実習前の準備段階の学修の重要性と臨地から学内に戻った際の振り返りの補いを組み合わせることが教育の質の維持に関する課題といわれており[19]、実習の在り方についてはさらに検討が必要である。

実習に対する学生の思いでは、全員が感染リスクに対する不安をもっていることから、学生自身の健康管理と感染予防対策の徹底の重要性を再認識した。また看護師としての将来への不安は60％以上である一方で、80％以上の学生が〔COVID-19感染問題の影響による偏見や待遇等を考え、看護師になる気持ちが揺らいでいる〕にそう思わないと回答し、学生の意志が揺らいでいないことが確認され、看護職を目指す学生たちに対し、より良い学修環境・実習環境を整えていくことが学生の思いに対する大学や教員の役割であると考える。

Ⅵ. おわりに

各大学がどのような実習を行い、どのような学習効果が得られているのかを知ることは今後の実習計画に大いに参考になるものであった。新型コロナウイルス感染症の終息が見えない状況の中で、今後、医療現場で活躍する看護学生をどのように教育していくことが良いのか、より効果的な実習方法を模索しながら、学内実習で代替できることを検討し続けることが重要である。

今回の文献検討を通して、オンラインを中心とした実習形式であっても一定の学修効果が得られているということは、看護学士課程における臨地実習のあり方を見直す機会にもなり得るものと考える。大学と実習施設間で十分協議し、臨地実習でなければ学べないことを厳選したうえで、短期間の臨地実習と学内実習での学修を組み合わせるなど、新たな学びの方法を検討することが課題である。

引用文献

1）新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について（情報提供）
https://hojin.nurse.or.jp/hojin_system/upload/9900049620200623135630fl_1/20200623-725.pdf（2021年９月10日検索）

2）看護学実習ガイドラインおよび新型コロナウイルス感染症の発生に伴う学校養成所の運営に関する取扱い，2020年10月文部科学省高等教育局医学教育課
https://www.janpu.or.jp/mext_mhlw_info/file/doc03.pdf（2021年９月10日検索）

3）大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf（2021年９月10日検索）

4）看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～．平成29年10月
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf（2021年９月10日検索）

5）文部科学省：臨地実習の在り方
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm（2021年９月10日検索）

6）Judith　Garrard著、安部陽子（訳）：*看護研究のための文献レビュー－マトリックス方式－*，医学書院，2012.

7）山口裕子，村瀬美香，松本佳代他：臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告～在宅看護学実習での学生アンケート結果から～．*熊本保健科学大学研究誌*，18：103‐115，2021.

8）岡田麻里，片山陽子，諏訪亜季子：対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価－COVID-19感染予防対策を契機に実装した教育システム発展のために－．*香川県立保*

健医療大学雑誌，12：57-65，2021
9）桑村淳子，栗原明美，中林菜穂他：成人看護実習Ⅱ(慢性期)のオンライン実習における学習効果と課題～実習後のアンケート調査結果より～．*順天堂大学保健看護部順天堂保健看護研究*，9：58-65，2021.
10）早瀬麻子，木下純子，田尻后子：オンラインでの母性看護学実習における学習効果．*佛教大学保健医療技術学部論集*，15：29-44，2021.
11）太田晴美，大崎真，早坂笑子：新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価－学生アンケート結果から－．*東北文化学園大学看護学科紀要*，10(1)：27-42，2021.
12）髙岡寿江，石堂たまき，薮下八重：新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の想い．*佛教大学保健医療技術学部論集*，15：55-68，2021
13）篠原幸恵、讃井真理、河野保子他：看護系大学のコロナ禍における基礎看護学実習Ⅰの学内実習の実態と教育の質確保に関する検討．*健康生活と看護学研究*，3：14-19，2020.
14）圓増文：医療従事者と患者の信頼関係構築に向けた取り組みとしての「目的の共有」．*医学哲学医学倫理*，26：1-10，2008.
15）看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標、平成30年６月　一般社団法人日本看護系大学協議会
https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf（2021年９月10日検索）
16）前掲５）
17）菱沼典子：COVID-19は看護学教育を変える－臨地実習再考－．*聖路加看護学会誌*，24(2)，2021
18）新井英靖：看護教育に生かすアクティブ・ラーニング，メヂカルフレンド社，2019，pp90-105.
19）新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議　報告書　看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について，令和３年（2021年）６月８日
https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf（2021年９月10日検索）